

シンポジウム：東日本大震災からの教訓、これからの新しい国づくり

主 催：日本建築学会

後 援：空気調和・衛生工学会、建築設備技術者協会、こども環境学会、地盤工学会、地理情報システム学会、土木学会、日本機械学会、日本建設業連合会、日本建築家協会、日本建築構造技術者協会、日本建築士会連合会、日本建築士事務所協会連合会、日本鋼構造協会、日本コンクリート工学会、日本地震学会、日本地震工学会、日本造園学会、日本都市計画家協会、日本都市計画学会、日本免震構造協会（予定、五十音順）

2011年3月11日に我国を襲った東北地方太平洋沖地震（M9.0）による東日本大震災は、科学・技術が進み、耐震工学にも十分な注意が払われていたと信じられていた日本に再び甚大な災害を引き起こしました。既に半年以上が過ぎましたが、復旧復興の道のりはまだまだ遠いと言わざるをえません。この震災は東日本だけでなく日本全体に大きな傷跡を残しましたが、とくに建築やまち作りに携わる人々に学ぶべき多くの教訓を残しました。

日本は美しい海に囲まれ南北に連なる島国であり、急峻な山々と森林、美しい湖や川があり、自然の豊かな素晴らしい国です。ただ、このたびのように大地震、大津波に頻りに襲われ、巨大台風、豪雪、崖崩れなど自然の猛威の厳しい国でもあります。

このたびの災害は、過去に大きな津波被害を受けていることが分かっている地区に、津波への注意を払わないまちや村を作ってきた人々の問題です。まちづくりや都市計画の問題であり、一つ一つの建築物を作ってきた住人、設計者、施工者、行政、これらを見過ごしてきた我々全員の問題です。日本人はどこに住んで何を糧に生きるかに戻って考えなければなりません。

原子力発電所の破壊は日本人だけでなく世界の人々に衝撃を与えました。エネルギー資源のない日本がこれからの文明をどの方向に進めるべきか多くの人々が悩んでいます。これだけでなく、日本には少子高齢化、元気のない地方と大都市集中の問題があり、人々の生活スタイル、海外に負けない日本の産業、持続可能な社会、災害に負けない社会や国づくりなど、すべてを考えなければなりません。

このたびの地震は東日本だけでなく、遠く大阪の建物まで大きく揺らしました。震源地に近い岩手県、宮城県、福島県、茨城県などでは、今までの地震被害と同様の揺れによる被害もあり、天井や内壁、さらに外壁の落下など、二次部材の被害の多さも問題になっています。千葉県に顕われた地盤の液状化は住人にとって大きな問題です。基礎構造の問題ともいえますが、敷地選びの問題でもあります。3月11日の東京の一日の大混乱と帰宅困難者をみると、都市をどこまでも大きくし、人口や機能を集中しているが、大丈夫なのかと誰でもが考えます。

個々の建築物はそれぞれ個人、私企業または公共などの所有物です。ただ、この建設にかかわる技術は時代毎におおよそ同じ土俵の上ののっており、地震時の建築物の応答や挙動、軽から重にわたる各種の損傷や被害にはそれぞれ共通点が多くみられます。これらの情報を個人や組織の枠を超えて極力共有化し、よりよい技術開発に役立てることが必要です。

次に考えなくてはならないことは、日本の他の地区を襲う次の大地震です。このたびの災害の教訓をもとに次の大地震に備えて、建築物の耐震性の確保、二次部材の崩落防止、津波への対策などをしなければ、知恵のある人間とはいえません。

このシンポジウムの初日（3月1日）には、建築会館ホールを用いて、日本建築学会の一年間

の調査活動および復旧および復興に関する支援の報告、日本建築学会から今後の研究にかかわる提言の発表、他学会の一年間の活動報告などを計画し、2日目(3月2日)には建築会館の3部屋を用いて、一般講演を計画していますので、研究や活動の発表を公募致します。有意義なシンポジウムになると期待しています。(日本建築学会会長 和田 章)

●シンポジウム「東日本大震災からの教訓、これからの新しい国づくり」実行委員会

委員長：新宮清志(日本大学)

幹事：岡田 章(日本大学)、竹内 徹(東京工業大学)、長谷見雄二(早稲田大学)、

委員：居駒知樹(日本大学)、宇野 求(東京理科大学)、大崎 純(広島大学)、
小林英嗣(北海道大学)、後藤 治(工学院大学)、定行まり子(日本女子大学)、
佐土原聡(横浜国立大学)、塩原 等(東京大学)、田中礼治(東北工業大学)、
登川幸生(日本大学)、時松孝次(東京工業大学)、中島正愛(京都大学)、
中林一樹(明治大学)、平石久廣(明治大学)、布野修司(滋賀県立大学)、
源栄正人(東北大学)

3月1日(木) 9:00~19:10 活動報告・招待講演

会場：建築会館ホール

[プログラム](#)

- ・東日本大震災から一年
- ・日本建築学会の活動報告
- ・招待講演
- ・行政の活動
- ・各分野からの調査・研究報告

3月2日(金) 9:00~19:45 一般講演

会場：建築会館会議室

[プログラム](#) [発表会場一覧](#)

- ・3部屋同時開催による一般講演(116題)
- ・主なテーマ：

地震動、設計用地震動/津波の被害と対策/構造物の地震挙動と被害/二次構造物の被害と対策/耐震改修・今後の構造設計/仮設住宅の生活コミュニティ/火災・エネルギー/仮設住宅等の環境/建築物の地震被害調査/避難支援/復興支援・高所移転・コミュニティ/文化の継承、歴史的建造物の被害/国土計画・地域計画・復興計画論・計画思想等

3月1日(木)~4日(日) 画像・映像の展示

会場：建築博物館ギャラリー

日本の地震観測史上、最大規模となった東北地方太平洋沖地震では、広範囲にわたって多大な被害を引き起こし、その影響は今日に及んでいます。起こった出来事と被害にはこれまでの予想を超えるものもあり、その全容の把握と分析が大きな課題となっていますが、一方、地震の発生が日中であったことや、画像・動画の記録メディアが社会活動・生活のツールとして日常的に使われてきたことを背景に、膨大な画像・動画が記録されました。

大災害でこれだけ画像・動画が記録されたのも未曾有のことであり、災害において被害が発生するまでの過程の理解をはじめ、これまで学界等ですらよく理解されていなかった課題の発掘という点では、これらの画像・動画資料の活用が大いに期待されるところです。

たとえば、津波のような現象は、もともと、災害後の状況の調査だけでは、災害当時、どうい
うことが起こったかを理解することに大きな限界があり、集団的な避難行動等も、避難した個人
の記憶等は事後調査できても、集団としての行動の鳥瞰の様相等は事後調査ではほとんど把握不
可能です。また、今回震災では、市街地火災・山火事、海面上の油面火災等も発生したが、焼尽
した痕跡の調査では、火災の動態等は把握が困難です。これらの現象の理解については、現在進
行形で撮影された映像の価値はきわめて大きいと考えます。動画以外であっても、デジカメで撮
られた画像は撮影日時が正確に把握可能であることや、災害直後の画像には、その後の調査時点
では消失していく諸状況が映り込んでいるものが多いため、災害で何が起こったかを把握する手
がかりとして大きな価値を持っています。更に、建築教育、防災教育などでは、災害映像の活用
はきわめて有用であることは、これまでも広く認識されている通りです。

画像、動画は、今後、災害をはじめとする再現不可能だが、重要な現象の把握、記録にますま
ず重要な役割を果たしていくと考えられることに鑑みて、本シンポジウムでは、東日本大震災に
関して各方面で記録された画像・動画について、専門的・学術的な観点から、どんな意味を引き
出せるかを探る展示を行います。

-
- 参加費：**A) 一般講演者（投稿料、両日のシンポジウム参加費およびシンポジウム梗概集代）
日本建築学会会員 5,400 円、学生（修士まで） 4,500 円、会員外 10,000 円
B) シンポジウム参加者（両日のシンポジウム参加費およびシンポジウム梗概集代）
日本建築学会会員 4,000 円、学生（修士まで） 3,000 円、会員外 6,000 円
東日本大震災および一連の災害による被災地から参加の方は、参加費無料といたしま
す。（資料代は実費を頂戴いたします。）

申込方法：日本建築学会の[ホームページ](#)より事前に申し込んでください。
なお、参加費は、①クレジットカード、②銀行振込、③現金書留のいずれかの方法で
お支払いをお願いします。

問合せ：日本建築学会事務局 浜田政治・三島 隆・小野寺篤
TEL03-3456-2051 E-mail：hamada@aij.or.jp mishima@aij.or.jp onodera@aij.or.jp